

[成果情報名] 平坦地における冬期どりニンジンの新作型

[要約] 冬期どりニンジンの適品種は「クリスティーン」である。播種適期は8月20日前後で、12月中旬から2月下旬まで収穫が可能となる。土壌が硬化しやすい灰色低地土では、播種直後、牛ふんおがくず堆肥を植え床の表面に散布することで、苗立率が向上する。

[担当] 総農セ・栽培部・野菜科・五味敬子

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

県産野菜の供給量は冬期から早春期にかけて少なく、出荷端境期の新たな品目が求められている。当時期の生産が可能となれば、年間を通じて収入を確保でき農家所得が向上する。

そこで本試験では、12月～2月の厳冬期にニンジンを安定生産することを目指し、適品種の選定、播種適期の把握、苗立率向上のための畦処理方法について検討を行い、平坦地における新たな作型を確立する。

[成果の内容・特徴]

- 1．12～2月に十分な可販収量を得られる品種は、供試7品種中「クリスティーン」（みかど協和）である（図2）。
- 2．播種適期は8月20日前後であり、これより遅れると収穫始期が大幅に遅れ、可販収量が減少する（図1、表1）。
- 3．苗立率向上のための畦処理方法は、播種直後に牛ふんおがくず堆肥を植え床の表面がかくれる程度に散布する（図3）。

[成果の活用上の留意点]

- 1．本作型は、露地の無マルチ栽培とし、冬期のトンネルやべたがけも必要としない。
- 2．本試験での栽植密度は畦幅150cm（床幅80cm、通路70cm）、株間10cm、条間25cm、3条まきの20,000株/10aである。
- 3．施肥は、普通化成肥料を用いて、N-P₂O₅-K₂Oの3要素成分量が各15kg/10aとなるように全面施用する。

[期待される効果]

- 1．県産野菜の流通量が少ない12～2月の厳冬期に、ニンジンの出荷が可能となる。
- 2．平坦地での新たな補完品目として、導入可能となる。

[具体的データ]

品 種	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「クリスティーヌ」(みかど協和)	8/20							

播種 収穫

図1 冬期どりニンジンの新字型

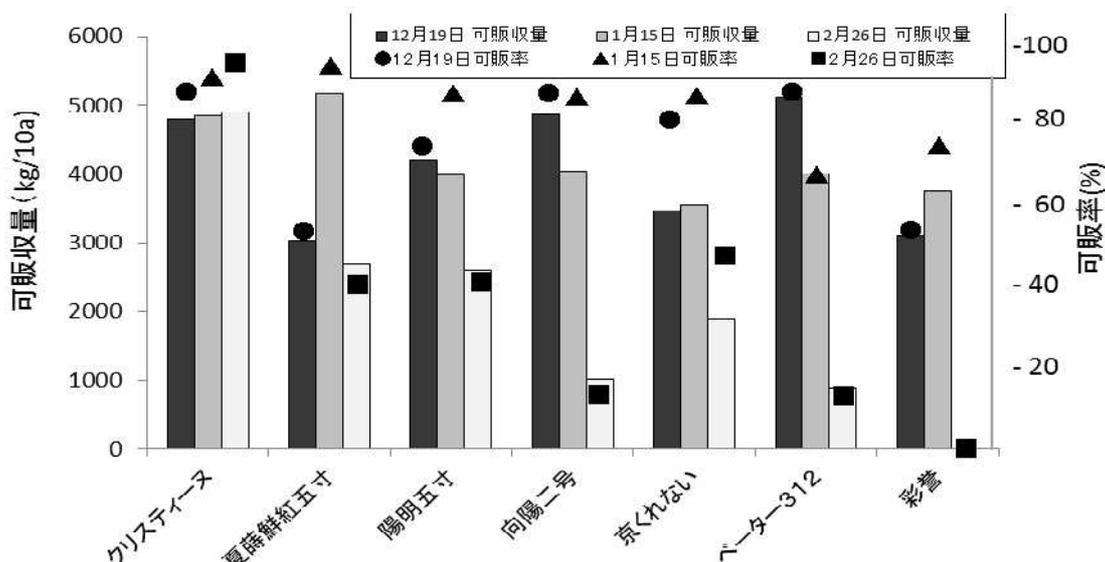


図2 冬期どりニンジンの品種の違いによる可販収量および可販率(2013年)

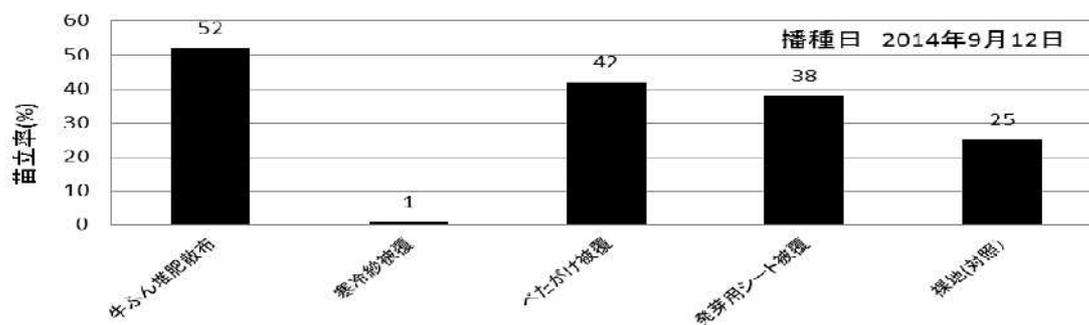


図3 畦の処理方法の違いによる苗立率(2014年)

表1 播種期の違いによる可販率および可販収量(2013年)

品 種	播種期	収穫日								
		12月19日			1月15日			2月26日		
		可販率 ^{z)} (%)	根重 ^{x)} (g)	可販収量 ^{y)} (kg/10a)	可販率 ^{z)} (%)	根重 ^{x)} (g)	可販収量 ^{y)} (kg/10a)	可販率 ^{z)} (%)	根重 ^{x)} (g)	可販収量 ^{y)} (kg/10a)
クリスティーヌ	8月21日	86.7	277 ± 67	4,805	92.3	263 ± 23.7	4,855	93.3	263 ± 62	4,907
	9月6日	-	-	-	86.7	153 ± 42	2,645	86.7	184 ± 52	3,191

^{z)} 裂根、又根、凍み、奇形などの異常株を除いた販売可能株の割合 ^{x)} 平均値および標準偏差 ^{y)} 根重 × 可販率 × 栽植密度

[その他]

研究課題名：平坦地における主要葉根菜類の冬期および早春期どり栽培技術

予算区分：県単

研究期間：2013～2014年度

研究担当者：中村知聖、赤池一彦、五味敬子